

夜を歩けば2

ガテラルデイズ

あやめゆう

Yu Ayame

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 白味噌

目 次

章前 My scream. 9

第一章 グラントパスト 19

第二章 ガテラルデイズ 59

第三章 グロウルライフ 157

章後 Your whistle. 201

あとがき 214

CHARACTERS

宮村一野

みやむらいちの

石本花梨

いしもとかりん

せんじゅいんさくや

千手院
咲耶

齊藤
龍空
ささきりゅうくう

かしまいぐ
鹿嶋
郁子
かしまいぐ

早坂
圭三
はやさかけいじ

水倉
真冬
みずくらまふゆ

夜を歩けば2

ガテラル
デイズ

章前 *My scream.*

叫びたかった私の本音を
冗談めかしてぼつりとこぼす
あなたのことが判らない



九月の終わり頃、クツションとマグカップを購入した。週に四日か五日くらいの頻度で女子高生が僕の部屋で受験勉強をするからだ。

二十二歳独身男の家に週の半分以上もやって来る女子高生だなんて随分と甘美な響きに聞こえるだろうし、僕としても響きだけなら甘美で艶めいて思う。しかし僕こと宮村一野と、受験生こと石本花梨の關係には甘さも艶もあるわけじゃない。

ならば、何があるのか？

それを深く考える気にはならないので、もし誰かにそんなことを訊かれたとしても、僕はいいかげんに肩を竦めて「成り行き」と答えるだろう。それ以外の何かもたぶんあると思うけど、物事はなんでもはつきりさせればいいわけじゃない。明確にしたせいで台無しになってしまうことだってあるのだ。例えば無理っぽい片思いとか。

ともあれ。

新品のクツションに女子高生の尻が乗せられるようになって二週間ほど過ぎ、すっかり秋も深まって近所の資材置き場ではトンボが熱心に交尾を繰り返して、街路樹の衣も赤や黄色に模様替えを済ませ、僕と石本さんは外へ出歩かずに部屋のテレビに映る紅葉を眺めていた——そんな日のこと。

「そういえば小さい頃、紅葉狩りって特殊な部族の特殊な風習だと思ってたんですよねえ」

僕の部屋の僕のテーブルの上に広げたノートや参考書にシャープペンシルで書き込みをしながら器用にテレビへ視線を向け、石本花梨はそんなわけの判らないことを言った。

「ああ、あれね。槍を持った男たちが地面に落ちた紅葉や銀杏を集めてハイテンションで小躍りする儀式でしょ。オチバタキっていう」

「そうそう。タキビダタキビダ、なんて呪文を唱えながら……なわけないでしょ」

相変わらずいいかげんですねえ、と石本さんは嘆息する。テレビの画面は秋めいた景色から打って変わり、柔軟剤を使っていない洗剤のコマーシャルが映っていた。

「そういえば、そろそろ切れるかな」

「トイレットペーパーも切れそうですよ」ノートに書き込みしながら石本さんは付け加える。「買い物に行くつもりなら、味噌と、めんつゆと、ネギと、あと食べたいものがあればリクエストに応えますけど、何かありますか？」

受験生のくせにやたら料理をしたがる石本さんである。彼女が入り浸るようになってから、我が家の調味料の種類は三倍に増えた。男の一人暮らしにシナモンがあっても仕方がないのだけだ。

「美味しい料理をつくってくれるのは嬉しいんだけどさ、僕を土に埋めて肥えさせようって魂胆じゃないよね？ その後、食べたらない？」

「『ガチョウ』だから、みたいなギャグですか」

「受験生ジョークだね」はっはっは、とホームコメディみたいになんて笑っておく。「僕を太らせなくてもいいから、勉強しなよ」

「今、何してると思います？」参考書を眺めながら嘆息する石本さん。「まあ、もし一野くんがヤギなら一枚破いて差し上げてもいいですけど」

「今してるのは雑談かなあ」

「ながら勉強です」

と石本さんは言って、こりこりとペン先を動かした。ノートに注目している間はシヨートボブの頭のとっぺんが僕の方を向き、参考書へ視線を動かすたびに毛先が揺れる。そうやって女子高生が受験勉強をしている限り、僕のテールが僕のものではないような気になるから不思議だ。

「ながらだっというなら、ついでに訊くけどさ」「はい？」

参考書から視線が僕へ。大きめの瞳が、内側から燃えるような緋色に変化しているのが見えた。

「最近は、どうなの？」

瞳の——というか、正確には虹彩の——変色は、

《異能》の証だ。

彼女はつい先月、『プチフランス』という《異能》に目覚めたばかりの《異能者》である。他人の思考を読み取ってしまうという能力で、ここで問題なのは『読み取れる』のではなく『読み取ってしまう』という点である。周囲の人間の思考が、勝手に彼女の内側へと流れ込んでしまうのだ。

強弱はあってもONとOFFはなく、石本花梨はいつでも周囲の人間の《思考》に晒されている。

例外は——僕。

空気や雰囲気^{ふんいき}を視覚化してしまう僕の《異能》、『ザクロビジョン』と干渉し合うらしく、石本さんは僕の思考だけは読み取ることができない。

だから石本花梨は週の半分以上の放課後を、僕の家で過ごしている。

ここが彼女の避難場所なわけだ。

石本さんは僕の大雑把な問いにちよつと呆れたような顔をして、はあ、と息を吐く。

「なんだか親戚のおじさんみたいな質問ですねえ。」

やあ花梨ちゃん、最近どうなの？」

「十八歳の女の子が二十二歳独身男の部屋に毎日のように入り浸って受験勉強して、ストレス解消に夕食をつくって、帰りは大体夜が更けてからってうんだから、そのくらいの科白^{せりふ}は出るさ。例えば親御さんとか、なんて言ってるわけ？」

「別に何も言われてないですけど、心配はしてるみたいですね」

他人の《思考》が判るのだから、百の言葉を尽くされるより伝わっているに違いない。

「で、きみは親の心配をスルーしてフリーターの男の家に入り浸っている」

「まあ、そうですね」

その葛藤^{かつとう}はもう済ませたとばかりに、石本さんはさらりと頷いた。

「学校の方は？ 先月の……なんだっけ、アサナントカくん？ あの仲良し四人組は？」

「アサまで出たなら残り一文字でしょ。どういう記憶力してるんですか。っていうか、気にするの遅くないですか？ もう十月半ばなんですけど」

「どうしても気になるような話題じゃないからね」雑談だよ、と僕は言った。石本さんは緋色の瞳で二秒くらい僕を睨にらんだ。

「……今は、仲良し四人組は解散ですよ。浅間くんあさまにはめでたく彼女ができて、それで山下さんやましたが今更いまさらになつて浅間くんをキープしようとして——」

「あ、ごめん。そのくらいでいいや」

「興味ないなら訊かないでくれます？」大仰おおぎような溜ため息いき。「二野くんこそどうなんです？ 最近、ずっと家にいるみたいですよ」

「バイトがないからね」

厳密には、仕事はあるけど僕には振られない、という話だ。

「だからって一日中家にいたら、太っちゃいますよ。それこそフォアグラみたいに」

「最近ほ女子高生が美味しいごはんをつくってくれるからね。ちなみに今日は何？」

「……なんだかんだで、つくったら食べますよね。

案外、楽しみにしてるんじゃないですか？」

呆れたような顔のまま微妙に唇くちびるの端を曲げ、今日は鶏肉のネギ塩焼きです、と石本さんは言った。

そして参考書へ視線を戻し、受験勉強に戻った。

そりゃあ、他人の思考が頭の中に流れて来るのだから、学校での勉強は捗はかどつたりしないだろう。予備校だって同じことだし、友達の家も同様、自分の家だって親がいる。そして自室に引きこもり続けていれば気が滅め入るといふことなのだろう。

どこにも居場所はなくして。

外側アウターで——独りきり。

社会の、世界の、みんなの外側にいるから、僕は《異能者アウター》と呼ばれている。

僕はとつくの昔に慣れているけれど、『異能者』になつて一箇月しか経っていない石本さんは、まだ慣れていない。そういうことだ。

それから三十分ほど無言が続き、僕はテレビと手元の文庫本とペンを動かす女子高生を順繰りに眺めていた。どれもちゃんと見ていたわけじゃないのだが、石本さんの頭頂がびよこびよこ動くのは、なかなか楽しい光景だった。

「――平和ですねえ」

不意に石本さんが言った。

「え？ ああ、ジュンツ四個とトイツ一個のあれだね。メンゼンで、字牌は含まない」

「……一野くんって、本当にちよいちよいつまないこと言いますよね」

わざとらしく嘆息してから、それはピンフですと付け加えてくれる石本さんである。ツッコミは冷たかったがフォローは優しくかった。

「常に面白いことを言えるならお笑い芸人になつて

るよ。ちなみになんでまた？」

いきなり平和だなんて言い出したのか。

「それは……まあ、ふと実感したからです。誰の考えてることも頭の中に流れ込んで来ないし、ただ一人でいるわけじゃないし……いや、つまない冗談言う人はいますけど。でも、こういうのって、なんだか平和な感じ、しません？」

「なるほど――」

と僕は頷き、テレビの方へ視線を移した。ちょうどニュース番組に変わっていて、都内で起きた暴行事件について報道していた。若者数人のグループがグループ内の一人を他の全員で殴り殺したという。

「――確かに、平和だね」

「撤回します」と石本さんは言つて、肩を竦めた。

「平常運転です。世は全てこともなし」

「神は天に御座しまし、か」
受験で使う知識だっけ？僕は大学受験をしたことがないので判らなかつた。

雑談交じりの勉強がしばらく続き、区切りのいいところで石本さんはノートや参考書を片付け、台所へ向かって料理を始める。

九月の終わり頃までは、さすがに女子高生におさんどんさせるのは気が引けていたのだが、本人がストレス解消だと言い張るので好きにさせることにしたのだ。僕の台所ではあるが、僕と僕の台所は愛し合ってるわけじゃない。

そんなわけで用意されたのは鶏肉のネギ塩焼きとサラダに味噌汁。無国籍だがシンプルな献立だ。

「レタスを基調にした、いわゆるシーザーサラダは、かの有名なジュリアス・シーザーが好んで食べていたという逸話があるけど、あれ、嘘だってさ。そんな資料は残ってないらしい」

チーズとバジルを和えたドレッシングに感心しながら、僕はいいかげんなことを言った。

「あつ、一野くん、見てくださいよ」

と、石本さんはテレビを指差した。僕の話を見無視

する技能を会得したようだ。僕はネギ塩焼きを口に放り込み、言われた通りにテレビを見た。

画面に映っているのは頭髮がピンク色の小柄な女性だった。マイクを持ってステージの上で歌っており、バックバンドとの息もぴったり。美人だがアイドルではなく、シンガーというやつだ。

「知ってますか、この人、七枷なながせの出身なんですよ。地元のライブハウスで演奏してたって」

「へえ……」

どうでもよかった。が、テレビに映るヴォーカリストに何か引つ掛かりを覚え、僕は首を傾げた。

「どうしました？」

「いや、この人……見たことあるかも」

「知り合いなんですか!」

ぎょっとしたふうな石本さんには構わず、僕は味噌汁を啜りながらテレビを注視する。テロップに書かれている『MARIYA』という文字。

脳裏に浮かぶ、二年前の光景。

「ああ——真冬^{まふゆ}くんの知り合いだよ、この人。真冬くんのバンドのヴォーカルだった」

「水倉^{みずくら}さん、バンドやってたんですか!？」

左手に茶碗を持ったまま急にテンションを上げる女子高生。

「そうそう、ああ見えてバンドマンだったの。ベースリストでさ」

「つてことは、水倉さんって有名人の知り合いなんですか。あ、同じバンドだったつてことは、知り合いつてよりも深い仲だったたり?」

「さあ?」

「いやいやいや、暢気^{のんき}にごはん食べてる場合じゃないですよ。ビッグニュースじゃないですか!」

「米くらい食べさせてよ」

「有名人と知り合いかあ」思いつき僕を無視する女子高生。「……あ、なんか、近いうちに七枷に来るみたいですよ。ライブするつて」

「まあ、そりゃあ、こんな地方都市にショッピング

には来ないだろうね」

「こんな地方都市にわざわざライブしに来るのも意外ですけどね。それに意外っていうなら水倉さんですよ。こないだ会ったときは、そんなこと判らなかったですし……」

相手の考えていることが判ってしまう《プチプランス》は、逆に言えば相手の考えていないことは判らないということだ。あのと、きは、真冬くんは自分の過去のことを考えていなかったのだろう。

「仕事に真面目、水倉真冬くんだからね」

適当なことを言つてサラダを食べ切った。画面からはもうピンク頭のヴォーカリストが消えていたのだ、石本さんも食事に戻ってくれた。

「でも、水倉さんつて、なんでサイトウリサーチで働いてるんですか? バンドのベースやってたんですよね? しかもMARIYAみたいなヴォーカルのいるバンドで。そのまま続けてたら、さっきのテレビに水倉さんも出てたんじゃないですか?」

「かもね。でも、そうはならなかった」

何故なら水倉真冬もまた《異能者》だから。ロックバンドのベーシストとしてオーディエンスの喝采^{かつさい}を浴びるような人生は選べなかった。選ばなかったというべきかも知れない。

「ちなみに、前に会ったときは、真冬くんは何を考えていたわけ？」

鶏肉のネギ塩焼きを箸^{はし}でつまみながら《プチプランス》の《異能者》へ訊いてみる。緋色に発色していた瞳は、やや暗めの茶色に落ち着いていた。

「えーっと……私のことを殺そうかどうか考えてましたよ。もちろん、飛び降り事件の『犯人』についてとかも考えてました」

仕事に真面目ですね、と石本さん。そういう科白を平気な顔で言えるあたり、結構こなれてきたと言えるだろう。毎日他人の考えてることを受信していれば、そのくらいの図太さは必要だろうけど。

首肯^{しゅくきん}する僕に、石本さんは付け加える。

「あと、一野くんのことをぶつ殺してやりたいとか考えてましたよ。かなり頻繁に考えてました」

「……さすが真冬くん」

ブラボー、と眩^{くら}いて僕は箸を置き、ごちそうさまを言った。

「おそまつさまですけど」と石本さん。「一体何をしたら、ああいうクールっぽいイケメンにあそこまで嫌われるんです？」

「初めて会ったときも、真冬くんは物騒^{ぶつそう}だったんだよ。だから最初から嫌われてたような気もするけど——まあ、二年前の事件が原因かなあ」

「二年前の事件？」

そう、あれは二年前の今頃。

僕がまだサイトウリサーチでバイトを始める前。音楽と、暴力と、《穢^{けが}れ》の話——。

第一章 グラントパスト

ロックバルーンは飛んでった
ロックバードも飛んでって
石ころだけが残された
蹴っ飛ばされて
転がって
ロックンロールになったとさ



その頃の僕は運送会社（しんたう）の下請け業者でアルバイトをしていたので、段ボール箱を山ほど積んだトラックの助手席に座っていた。秋で、よく晴れていて、運転手の先輩はパチンコの勝ち負けを毎日のように僕へ語りかけていた。概ね負けているのだが、先輩は自分の負けを忘却する才能に溢（あふ）れていた。

「おまえはさあ」

と金髪を帽子の下に押し込めた先輩は、トラックを運転しながら助手席の僕を見た。

「やる気がねえのは判るんだけど、そういうのを判らせないようにするのもバイトの心得（こころえ）だぜ」

「仕事はちゃんとやりますよ」

助手席側の窓ガラスに寄り掛かりながら僕は言った。先輩はタコみたいに口を突き出して何かを表現しようだった。たぶん「参ったぜ」とか「よく言うぜ」とか、そんなところだ。

「ちゃんとやりますって」

「オーケイ、だったらいいことを考えた。次の荷物はおまえが一人で降ろせ。はじめてのおつかいってやつだな。幼稚園は卒園してるだろ？」

「もちろん。ですけど、一人で冷蔵庫を運んで来いと言われても困りますよ」

「ばか。それで荷物落としたら俺が怒られんだろ。荷物自体は小さいんだよ」

「なら大丈夫ですよ。荷物を持ってチャイムを鳴らして判子（はんこ）をもらう。他にありますか？」

「代引きじゃねーからそれでいい」

嫌がらせて面倒な客の相手を押し付けたのは視れば判ったが、僕はいちいち反旗（はんき）を翻（ひるがえ）さなかった。旗の持ち合わせがなかったからだ。

トラックが辿（たど）り着いたのは住宅街の外れにある二階建ての一軒家。荷物はそこそこ大きかったのに片手で持てるくらい軽かった。僕は立派な二階建ての立派な玄関で立派なチャイムを鳴らした。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。